

2013 年度 武蔵大学の創造的な教育実践

はじめに

西村 淳子（2013 年度 FD 実施委員長）

「灯台もと暗し」といいますが、他大学や外国の教育について勉強する機会があっても、自分の大学で他の教員が行っている授業について知る機会は意外と少ないものです。近年は武蔵大学でも、リレー講義を行ったり、ゼミ大会を行ったりして交流を図っていますが、目立たないところに興味深い授業が展開されていることもあります。FD 実施委員会では、そのような武蔵内部の教育の試みをピンポイントで選び出し、クローズ・アップしてみなさまに伝えます。本年は、前半で武蔵大学の教育活動の根幹を成す4つの事業を紹介いたします。第一は、文科省の助成金を受けて始まった「学部横断型課題解決プロジェクト」、次に、三学部の学びの集大成ともいえる「ゼミ大会」（経済学部）、「卒論報告会」（人文学部）、「シャカリキフェスティバル」（社会学部）です。そして、後半は、三学部の特色ある教育実践として、経済学部黒坂ゼミ、人文学部嶋内ゼミ、社会学部イシゼミの3つの授業をレポートしています。

「特集：武蔵大学の教員の取り組み」の取材を担当したのは、FD 研究員の新宅広二氏です。新宅氏は、学外では自然科学系の教育や自然環境保全などの活動を行っておられますが、教育施設としての動物園や水族館のプロデュース、テレビの自然科学番組の制作などにも携わっておられます。そして、自然科学の領域のみならず、一般に教育施設がいかに自己点検を行い、教育活動や成果を社会に発信していくかについての広い見識を備えておられます。武蔵大学のFD 研究員を務めていただいているのは、このような広い視野で大学教育を見直すためです。氏は、他大学のFD 活動の視察も継続的に行ってくださいしております。そして、もう一度武蔵大学の教育を振り返ったとき、大学内部の人間には当たり前になってしまっている武蔵の教育の意義や独自性を見つけてくださっています。新宅氏の目を通して武蔵の教育を見たとき、武蔵大学の教育にもこんな面があったのかという発見があるに違いありません。

取材にご理解をいただき、御協力をいただいた方々に心からお礼申し上げます。

1. 学部横断型課題解決プロジェクト

経済学部教授 高橋 徳行（運営チームリーダー）

この授業は、平成 20 年度に正規授業となり、今年度で足かけ 6 年目を迎えました。

平成 25 年度は、前期、後期ともに 2 つのクラスを開講しました。前期、後期の学部・学科別の履修者数は次のとおりとなっています。内訳をみると、前期は（2 クラス合計）、経済学部が 19 名、人文学部が 19 名、そして社会学部が 11 名の合計 49 名、後期は（2 クラス合計）、経済学部が 17 名、人文学部が 23 名、そして社会学部が 17 名です。

この授業は厳密な定員制度を設けてはいませんが、およその目安としては、1 クラス当たり 30 名（各学部から 10 名。1 クラスあたり 2 つのチームを結成するので、1 チーム当たりの 1 学部の上限は 5 名が目途ですので、前期、後期ともに履修生の上限は、各学部が 20 名、合計 60 名です。ですから、上限を 100%とした場合の、定員充足率は、全学部単位でみると前期は 81.7%、後期は 95%となります。いずれにしても、25 年度も合計 106 名の学生が履修しており、1 学年定員（930 名）の 1 割以上の学生が今年度も履修しました。

反省点としては、前期の社会学部からの履修生が少なく、2 つのチームを結成できなかったクラスがあったことです。同じクラスに 2 チームを設置することの狙いの一つが、（良い意味で）競い合うことにありますので、このようなことが起こらないように来年度は今年度の教訓を生かす必要があります。

また、最近の就職活動の影響を受けて、3 年生が後期の授業を敬遠する傾向も依然として見られます。例えば、25 年度後期は、全履修生 57 名中 47 名（82.5%）が 2 年生でした。ただ、この結果の原因は、2 年生が早めに履修しようとしているのか、3 年生が後期を敬遠しているのかのいずれも考えられます。

履修するきっかけの多くは、先輩に勧められた、教えてもらったとする割合が圧倒的に多く、学生間の口コミへの依存度が大きくなっています。このことは、本音を語り合える学生同士の情報網であるメリットがあると同時に、場合によっては、正しい情報が伝わっていない可能性も見逃せないことから、それらを補完する方法として、ゼミや履修説明会、そして印刷物などを使って、この授業の正しい情報を伝えていく努力が引き続き求められています。

(1) 履修者数 (前学期+後学期=106名)

学科名	平成 25 年度前学期 (全員 3 年次生)	平成 25 年度後学期 (2~3 年次生)
経済学科	12 名	4 名 (2 年次生 1 名、3 年次生 3 名)
経営学科	6 名	10 名 (2 年次生 8 名、3 年次生 2 名)
金融学科	1 名	3 名 (2 年次生)
英語英米文化学科	10 名	4 名 (2 年次生 2 名、3 年次生 2 名)
ヨーロッパ文化学科	4 名	16 名 (2 年次生)
日本・東アジア文化学科	5 名	3 名 (2 年次生)
社会学科	7 名	11 名 (2 年次生)
メディア社会学科	4 名	6 名 (2 年次生)
合計	49 名	57 名 (2 年次生 50 名、3 年次生 7 名)

この授業は2つの柱から成り立っており、一つが、課題提供企業のCSR報告書の作成、もう一つが社会人基礎力の育成と社会人基礎力の自己評価能力を高めることです。次からの一連の表は、後者の社会人基礎力に関するデータです。

初めに、社会人基礎力の12の要素に関して、授業を受ける前(事前評価)と受けた後(事後評価)の比較を見ると、前期と後期を合計した通年単位で、最も伸びた能力は実行力であり(改善ポイント1.79)、最も伸びなかった能力は規律性(改善ポイント0.11)となっている。ただ、これは、事前評価で自己採点して点数との兼ね合いで見する必要があります。

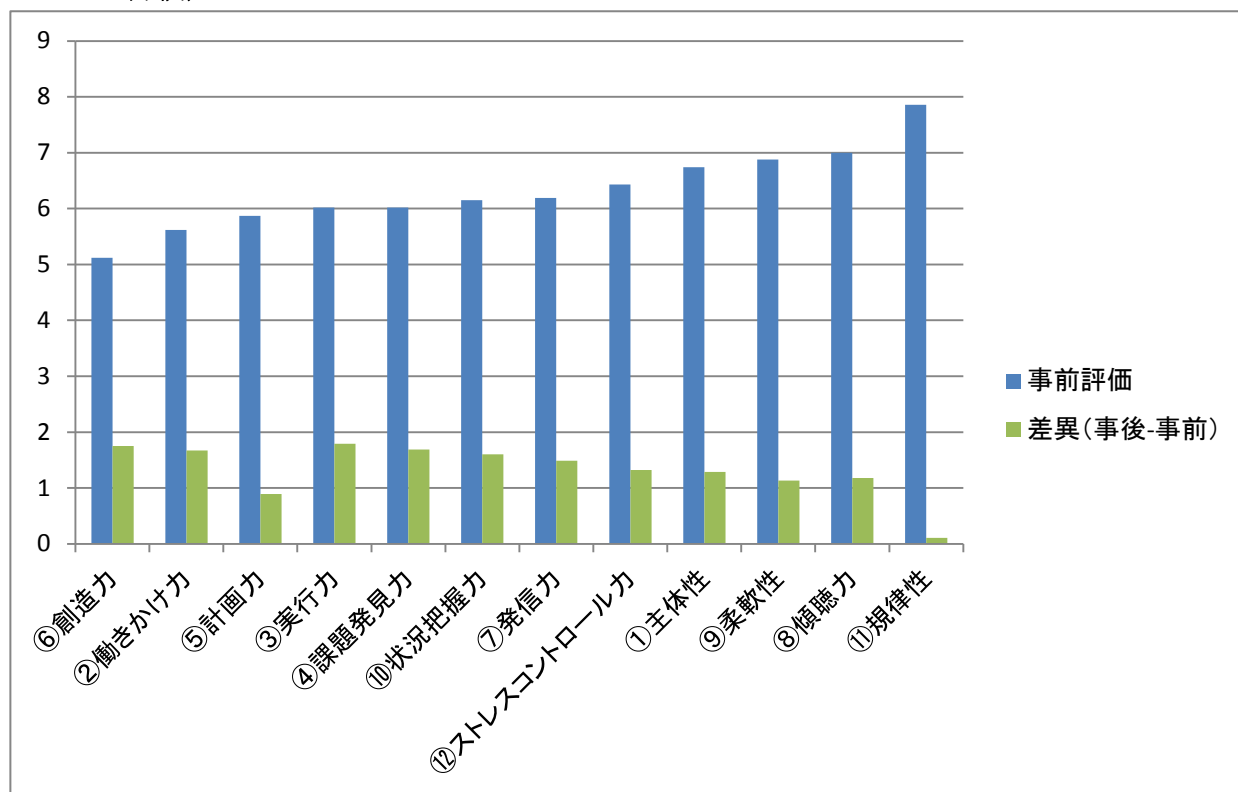
一般に、事前評価において低く自己採点していた項目は、改善ポイントが大きくなる傾向があり、事前評価において厳しめに自己採点した項目は改善ポイント小さくなる傾向があります。

武蔵大学の学生は、一般に大人しいという評価を受けることが多いですが、そのことを反映して「前に踏み出す力」を構成する3つの要素である「主体性」「働きかけ力」そして「実行力」の事前評価は、いずれも低くなっています。しかし、改善ポイントはいずれも高くなっていることから、この授業は、武蔵大学生の弱点を克服する意味で、かなりの効果を持っているものと考えられます。

(2) 社会人基礎力の事前・事後自己評価【2013年度履修生】 (学生による自己評価)

カテゴリ/要素		事前評価	事後評価	差異(事後-事前)
通年⑫要素平均		6.32	7.65	1.33
1. 前に踏み出す力(通年)		6.13	7.71	1.58
①主体性	前学期	6.59	8.10	1.51
	後学期	6.87	7.96	1.09
	通年	6.74	8.03	1.29
②働きかけ力	前学期	5.39	7.35	1.96
	後学期	5.82	7.24	1.42
	通年	5.62	7.29	1.67
③実行力	前学期	5.86	7.98	2.12
	後学期	6.16	7.65	1.49
	通年	6.02	7.81	1.79
2. 考え抜く力(通年)		5.67	7.11	1.45
④課題発見力	前学期	5.96	7.76	1.80
	後学期	6.07	7.67	1.60
	通年	6.02	7.71	1.69
⑤計画力	前学期	5.88	6.37	0.49
	後学期	5.85	7.11	1.25
	通年	5.87	6.76	0.89
⑥創造力	前学期	5.24	6.98	1.73
	後学期	5.00	6.76	1.76
	通年	5.12	6.87	1.75
3. チームで働く力(通年)		6.75	7.89	1.14
⑦発信力	前学期	5.86	7.55	1.69
	後学期	6.49	7.80	1.31
	通年	6.19	7.68	1.49
⑧傾聴力	前学期	7.06	8.33	1.27
	後学期	6.95	8.05	1.11
	通年	7.00	8.18	1.18
⑨柔軟性	前学期	6.78	8.24	1.47
	後学期	6.98	7.82	0.84
	通年	6.88	8.02	1.13
⑩状況把握力	前学期	6.16	7.86	1.69
	後学期	6.15	7.65	1.51
	通年	6.15	7.75	1.60
⑪規律性	前学期	7.51	7.98	0.47
	後学期	8.16	7.95	-0.22
	通年	7.86	7.96	0.11
⑫ストレスコントロール力	前学期	6.59	7.96	1.37
	後学期	6.29	7.56	1.27
	通年	6.43	7.75	1.32

(3) 社会人基礎力の事前自己評価と事後と事前の差異【2013年度履修生】 (学生による自己評価)



25年度の授業に協力いただいた8社は、株式会社アルプス技研、安立計器株式会社、株式会社木村技研、大幸薬品株式会社、株式会社大崎コンピュータエンジニアリング、日本コントロールシステム株式会社

日本コンピュータ・ダイナミクス株式会社、養命酒製造株式会社でした。

この中で、正露丸でお馴染みの大幸薬品株式会社と商品名と社名が同じであり、最近ではTVコマーシャルに積極的な養命酒製造株式会社は耳にしたことがあると思いますが、その他の6社の名前は聞いたことがないかもしれません。しかし、6社すべてが、得意とする事業分野では1、2位を争う企業です。例えば、株式会社木村技研は、トイレシステムのパイオニアであり、最近では、渋谷のヒカリエのトイレ式を設計・施工をして、かつメンテナンスを受け持っています。

このような企業から課題をいただくことで、学生の視野を広げる、社会的分業の奥深さを学ぶということもこの授業の特徴であり、この特徴はこれからも守っていきたいと思います。



授業風景

2. ゼミ対抗研究発表大会（経済学部）

経済学部准教授 古瀬 公博（ゼミ大会運営委員）

武蔵大学経済学部では、ゼミ活動の成果を発表する場として毎年12月第2週に（ゼミ対抗研究発表大会）ゼミ大会を開催している。主催はゼミナール連合会という学生団体であり、教員はそのサポートをするのみである。企画・関連部署との折衝、スポンサー集めなどの活動をすべて学生が行っている。ゼミ大会には2-3学年のゼミが参加し、日頃のゼミ活動の成果を報告する場としてゼミ大会は重要な位置を占めている。

2013年度は39チームが参加し、8ブロックに分かれて優勝を競い合った。教員審査員（2名）とOB・OGの社会人審査員（2名）によって審査され、優勝ゼミと準優勝ゼミには賞金が授与される。優勝・準優勝ゼミを発表する懇親会は毎年大きな盛り上がりを見せる。発表のアナウンスには大きな歓声が起こり、嬉し涙や悔し涙を流す学生もいる。ゼミ大会で優勝することは学生にとって大きな目標となっている。もちろん、ゼミ大会での審査員による評価が絶対的なものではなく、それは一つの基準にしか過ぎない。しかしそうであっても、ゼミ大会という大きな舞台で、審査員の教員やOB・OGの厳しい評価に耐え、研究内容を報告するということは学生にとって有意義な経験となり、ゼミ大会を目標にすることでゼミ活動での大きな教育効果が期待できるのである。

経済学部においては、2-3学年を対象としたゼミ大会が開催されているものの、他学部で行われているような4年生を対象とした卒業研究の報告会は企画されていない。各教員が個別に報告会を開催しているのが現状である。経済学部では、2011年度入学者から4年ゼミが必修化されたので、今後は、卒業研究を報告する機会をどのように設けていくかが課題である。

2013年度ゼミ大会・参加ゼミ一覧

ブロック名	ゼミ名	論題
経済A	黒坂1	日米経済と円ドルレート
	吉田1	財政政策が家計の効用に与える影響 について
	二階堂1	アベノミクスによる円高でも、海外進出するならどの国？
	田中1	アジア地域における大気汚染の要因分析と対策の提言
経済B	吉田2	アプリケーションについて
	二階堂2	グローバル化と発展途上国
	松川B	スマートシティ
	東郷(蟻川)2	開発経済について
経済C	杉本A	高齢者市場を開拓する
	今井(勝)2	学生生活を変える
	河合2	終活(いずれくる自分の死を考えた葬式、その他のプランニング)
	後藤2	近未来の農業
経営A	杉本B	女性が働き続けるために
	横川A	東アジアの工業化
	板垣1	国際的観点から見る経済・経営
	黒岩1	大学生向けアプリによるプロモーション戦略
経営B	高橋1	コミュニティビジネスの可能性
	目時1	マーケティング戦略における管理会計の役割
	松島1	BOPビジネス
	尾上2	ホテル業界の比較
経営C	黒岩2	CSの視点から見る武蔵大学の实態と課題
	目時2	ブランドマネジメントのためのブランド認知過程の解明 など
	古瀬2	星野リゾート『教科書通りの経営』: 机上の空論を現場の理論に
	米山2	ブルーオーシャンの開拓 など
金融A	板垣2	国際経営
	高橋2	若者の起業意識を高めるには
	増田2	リーダーシップ理論
	松島2	「O・RO・SHI For Dream」夢のある卸売企業
金融B	安達B	日本の産業と企業経営
	鈴木1	恋愛ファイナンス
	茶野1	投資家の行動分析
	神楽岡2	地熱発電の可能性: 原発の後釜と成りえるか
金融C	黒坂2	東日本大震災復興案
	徳永(久保田)2	「企業再生のストーリーを探る」: リーマン危機からの復活は本物か？
	安達A	株式投資
	海老原2	自社株買いのシグナリング効果
金融D	大野2	国際金融
	鈴木2	Baseball Player Pricing Model (BPPM) : プロ野球ドリームチームの構成
	茶野2	金価格: 価格決定とその要因

注)ゼミ名横の1, 2という数字は専門ゼミ1部(2学年), 2部(3学年)を表している。また, A, Bは縦割りゼミ(2, 3年合同ゼミ)を表している。

3. 卒業論文報告会（人文学部）

人文学部教授 角田 俊男（人文学部教務委員長）

人文学部では全学科の学生に必修としている卒業論文の成果を発表する機会として、毎年1月末に卒業論文報告会が開かれています（英米比較文化学科の英語コミュニケーション・コースの学生は卒論の代わりに「英文エッセイ」を執筆することになっています）。指導教員から推薦を受けた卒論・英文エッセイについて4年生が各学科10名前後報告し、翌年度に卒論・英文エッセイを作成する3年生を中心とした在学生在が聴講するとともに、ご父母、外部の方々にも大学ホームページなどで告知して、ご参加いただき、報告後に質疑応答が行われます。今年度は1月30日（木）午後1時から8号館の3教室に学科ごとに分かれ、次のような多彩なテーマで報告がなされました。各自の報告時間は英米学科が15分、ヨーロッパ学科が25分、日本・東アジア学科が30分と学科ごとに違うように、学科の教務委員の先生方が中心となって学科の特色も生かしながら企画運営を行っています。

<英米比較文化学科>（英語の題目は英語による報告）

- ・アメリカのバスケット・ボールと人種差別—テキサス・ウェスタン・カレッジに焦点を当てて—
- ・The Influence of Fashion—What Fashion Gives People—
- ・女性と紅茶—18世紀末のイギリス上流階級の社会
- ・The Role of Christianity as Seen in *Silent Hill*(2006): How the Eastern Perspective is Conveyed to Western Audiences by Means of Christian Ideas
- ・フェミニズムにおいてベティ・フリーダンの果たした役割—『新しい女性の創造』とアメリカ女性
- ・The Preservation of Language Diversity
- ・『エイジ・オブ・イノセンス』における無垢の二面性—イーディス・ウォートンのオールド・ニューヨークに対する皮肉と葛藤—
- ・Britain's Propaganda Campaign during World War I
- ・サム・クックの生涯と彼がアメリカ社会に与えた影響

<ヨーロッパ比較文化学科>

- ・馬の文化についての研究—人の生活における馬の需要と展望—
- ・ピカチュウという名の怪物
- ・ユナイテッド・カラーズ・オブ・ベネトンの企業活動
- ・太宰治と回心
- ・杉原千畝、日本通過ビザ発給における歴史的背景
- ・パウル・ツェランとイスラエル—「ユダヤ的孤独」とは—
- ・ミュシャの作品に見る構成と装飾
- ・17世紀アムステルダムの商人世界
- ・ドイツ宗教改革におけるルター像の変遷とその役割

<日本・東アジア比較文化学科>

- ・箱の中の小宇宙——お弁当・おせちにみる日本の盛り付け——
- ・渡辺華山の理想と現実——黄梁一炊の真実——
- ・『夢酔独言』における授受に関する表現について
- ・二・二八事件が台湾人の対中感情・対日感情に与えた影響
- ・中国朝鮮族の生活環境の比較と考察——日・中・韓・米の事例を中心に——

このように人文学部の3学科が対象とする諸地域の社会と文化についての学際的な教育研究が反映されています。卒論・英文エッセイは4年間の「学業の集大成」として必修とすることで、学部のディプロマ・ポリシーが目標としている「自発的な調査能力、データを整理・分析する力、総合する力、文章構成力、口頭による説明能力と現代的ツールを用いた情報伝達能力、意見交換（対話）を多角的に行って自説の客観性を高める力」を実践的に学ぶ場を与えていますが、卒論報告会は4年生の報告の内容やレジュメなどの配布物、パワーポイントなど映像情報機器の利用などから、この目標の達成度をはかる指標ともなっています。12月初旬の卒論提出後、卒業前の貴重な時間を割いて、この報告会へ向け準備を進め、卒論の口述試験終了後に分かりやすい言葉で報告をしてくれた4年生は、3年生からの様々な質問に答えるとともに、今後卒論を書く上での後輩へのアドバイスや励ましも与えてくれました。通常卒論指導は指導教授と4年生との間の個別指導やゼミの受講者の間での発表が中心となりますが、ここでは学年と卒論指導ゼミの単位を超えた広い対話の場となっていました。

3年生にとっては、卒論準備ゼミの一環ともなっていて、学科によっては、出席を義務付けて、それぞれの報告ごとにキーワードと質問・コメントをメモする用紙を回収するようになっているところもあり、多くの学生が参加し質疑応答にも積極的に加わっています。自分が卒論で書こうと思っている関心のある分野で新たなテーマを発見し、関連する卒論を書いた報告者に具体的な質問をして、卒論を書く上での苦労や工夫を直接聞くことができるなど、これから卒論を書く3年生にその意欲を高める1つの契機ともなっています。

今後も報告する4年生への指導、3年生の参加の度合いを高め、また質疑応答がより発展するような3年生への指導、報告会の運営の工夫などを通して、さらにこの卒論報告会が発展していくように努力する必要があります。なお報告者に報告会には参加できなかったが指導教授から推薦のあった数名の学生も加えた卒論の要旨をまとめた『卒業論文成果報告書』も翌年度の始めには発行しています。



4. シャカリキフェスティバル（社会学部）

社会学部教授 粉川 一郎（シャカリキフェスティバル担当）

シャカリキフェスティバルは、社会学部の卒業論文・卒業制作の成果を発表するための機会として2009年度からはじまり、本年度（2013年度）で第5回となりました。「シャカリキ」という言葉には、「社会学の力」という意味と「がむしゃらに頑張る」という意味が込められています。また、競うというよりも、多様な成果をおたがいに披露しあう場とという意味合いをこめて「フェスティバル」と名づけられています。

本年度のシャカリキフェスティバルは、2014年1月30日（木）に、1号館の3教室（1101・1001・1002）を用いて行われました。設定された部会数は9部会で、卒業論文19点と卒業制作8点の合計27点の発表と質疑応答が行われました。卒業論文は、社会学科・メディア社会学科の各ゼミから1点ずつが代表として選ばれています。卒業制作については、卒業制作を選択した学生のいるゼミから、各ゼミ2点以内が代表として選出されています。

当日のスケジュール、および開催された部会名、発表タイトル、は以下の通りです。

A会場：卒業論文（1001教室）

13:20～13:30	開会宣言（会場担当教員：粉川）	
13:30～14:50	総合テーマ (1) つながり 司会：内藤	なぜひとりでカラオケに行くのか—空気を読む若者たち— 地域社会に与えるパーソナルネットワークの影響 —練馬区大泉学園町商店会活動から— 携帯電話の利用がコミュニケーション能力に及ぼす影響
14:50～15:00	休憩（10分）	
15:00～16:20	総合テーマ (2) よのなか 司会：安藤	21世紀の学生運動～今後の社会と新左翼～ ヌードと社会～人々はなぜ芸術に性を求めるのか～ 原発批判の音楽史
16:20～16:30	休憩（10分）	
16:30～17:50	総合テーマ (3) じぶん 司会：矢田部	変身から見る現代社会と若者のアイデンティティー社会によるモデル呈示— 女性の海外留学と「自分らしさ」の獲得の関係—半構造化インタビューの分析から— 非行少年は『更生』出来るのか—保護司から更生システムを再考する—

B会場：卒業論文（1101教室）

13:20～13:30	開会宣言（会場担当教員：石森）	
13:30～14:50	総合テーマ (4) ジェンダー 司会：松井	規定されない性のあり方とはなにか お姫様は永遠の憧れなのか—ディズニープリンセスにみる女性像と変わりゆく女性の生き方— セクシュアルマイノリティにおけるパートナー観—当事者の語りからみえる多様で平等な関係性と可能性—
14:50～15:00	休憩（10分）	
15:00～16:20	総合テーマ (5) コミュニティ 司会：中西	エコツーリズムと地域の主体性—埼玉県飯能市の事例から— コミュニティサイクルの可能性・課題 旧島民と新島民からみる小笠原の自然観
16:20～16:30	休憩（10分）	
16:30～17:50	総合テーマ (6) アイドル 司会：南田	女性向けコンテンツにおける新選組 アイドルにのめりこむファン～モノノフの実態～ 「ゆるキャラ」ブームはなぜ起こったのか～「くまモン」の現地調査を中心に～ 人気者の社会学

C会場：卒業制作（1002 教室）

13:20～13:30	開会宣言（会場担当教員：奥村）	
13:30～14:50	総合テーマ (7) 映像 1 司会：イシ	社会を変えるには～ロックンローラー島昭宏の選択 放課後の黒板～アニメーションで学ぶメディアリテラシー～ 女川町竹浦復興への道
14:50～15:00	休憩（10分）	
15:00～16:20	総合テーマ (8) 紙媒体 司会：小田原	「家族の味」食卓から見る現代社会の家族のすがた サイクリストから見た 被災地の今 『live close together 一緒に生きる』を基に「世界から飢餓をなくすために・食べ物の“もったいない”をなくすために」
16:20～16:30	休憩（10分）	
16:30～17:50	総合テーマ (9) 映像 2 司会：松本	私にしかできないこと ーある韓国人教師が考えさせたことー 万てん ー負けず嫌い芸者の“今”

記念品贈呈式+懇親会（食堂ホール+学生ホール）

18:00～19:30	記念品贈呈式+懇親会
-------------	------------

このシャカリキフェスティバル実施にあたり、学生たちはどのような準備をしているのでしょうか。まず、代表の選出は各ゼミによってやり方が異なります。学生がそれぞれの卒論・卒制を発表した上で投票するケース、希望者が立候補するケース、あるいは教員側が指定するようなケースもあります。選定が行われるのは12月中旬。シャカリキフェスティバルの約1か月前です。

その後、各学生は、当日の発表内容の作成、資料の準備、プレゼンの練習など、さまざまな準備を行います。もちろん、この作業は発表者一人の力で行うのではなく、ゼミの学生の協力のもと行われます。卒業論文・制作の全体像を短時間のセッションですべて発表することはできません。その論文において、もっとも重要な点はどこか。どういった内容が後輩たちにとって参考になるか、効果的に相手に伝えるためには、どういった工夫をプレゼンテーションに盛り込むべきか。熱心な議論がゼミ生の間で交わされ、プレゼンテーションは日を追うごとにブラッシュアップされていきます。発表は一人の学生が自分の研究について行う訳ですが、その作成プロセスにはゼミ生みんなの力がそそぎこまれ、まさに「ゼミ活動の集大成」としてシャカリキ発表者のプレゼンは作りこまれていくのです。

一方、シャカリキフェスティバルはあくまでも「お祭り」です。ゼミの中にはお祭りとして発表を盛り上げようと、発表者以外のゼミ生が応援団としていろいろな取り組みを行うケースもあります。たとえば、横断幕を作ってみたり、ポスターを掲げてみたり。中には、発表内容にあわせたコスプレを行って、発表の雰囲気盛り上げようとするようなユニークな応援団もいたりします。

このように、シャカリキフェスティバルは単に優秀な卒論・卒制の発表の場として機能するだけではなく、3年次4年次と2年間ゼミで一緒にすごした仲間が「最後のゼミ活動」としてそのチームワークを機能させる場となっているのです。まさにゼミの武蔵ならではの取り組みであるといえるでしょう。

5. 特集：武蔵大学の教員の取り組み

経済学部 “ゼミの武蔵” の外部評価 ～日銀グランプリ最優秀賞受賞の事例より～

取材協力：黒坂 佳央 教授（経済学部）

文責：新宅 広二（FD 研究員）

武蔵大学の経済学部・金融学科ではゼミの研究活動が『日銀グランプリ受賞』という第1専門職領域の外部評価で最高の賞を受賞するに至った。武蔵大学経済学部金融学科・黒坂ゼミは、3年生4名のチーム編成で『被災企業訪問から考える、被災企業救済の新たなスキームの提案～災害に強い国づくりファンド～』の研究を発表した。被災企業の二重債務問題を解決するためのファンドづくりや保険制度構築などの必要性を、被災企業を実際に訪問したフィールドワークを取り入れ提言し、難解な内容をわかりやすく伝えるためのアイデアとして劇風のユニークなプレゼンテーションを行った。

本年度は全国から120編の論文がエントリーされ、クラウドファンディングや電子マネーといったIT技術の活用、大規模災害への対応といった、上位進出の常連校含むハイレベルなコンペの中、研究内容、プレゼン、質疑応答の対応能力など総合力で、黒坂ゼミが最優秀賞となった。受賞理由の審査員の講評としては、『本提言は、自分たちの問題意識を出発点として、被災地において関係者に取材し、課題がしっかりと捉えられている。その上で、将来大災害が発生した場合の備えという視点から、その対応策を考え、公的資金に頼りすぎず、民間資金による自助・公助や情報共有の促進によりスピーディな復興を実現しようとする姿勢も高く評価できる。さらにプレゼンテーションにおいて、自らの主張を適確に伝えようとする工夫がみられた。』と評されている。

高い教育力に裏打ちされた受賞に際して、指導教官の黒坂教授は主として次のことをポイントとしてあげている。

- ①テーマ選び
- ②フィールドワークの重要性
- ③経済学部の研究発表会『ゼミ大会』の伝統の実績

教育的に経済学の面白さを伝えるためには、テーマ選びを重要視している。社会問題を経済学（金融学）を通して分析し、専門性を活かして社会貢献できるという教育のメッセージを組み込むことで、大学で学ぶ楽しさに気づきを与えている。さらに、それらが受け売りや机上のものではなく“自分たちのもの”に変化させるために自分の目で見聞きするフィールドワークを重視して実践させている。学生の発想を信じて研究の場は自由度を高くする一方で、学生個々の性格・適正・能力を見極めて、個々の役割や自信につながるような長期の綿密な指導のシナリオが感じられた。武蔵大学の貴重な資産のひとつでもある第一職種の最前線で活躍するゼミの卒業生のネットワークも活用しているところも、こういった大きな賞で評価されるための実学的な指導体制・教育ネットワークとしての厚みを感じた。さらに日銀グランプリは、研究論文の内容だけでなく、“伝える力”としてのプレゼン力も重要な評価要素とされているのだが、この点に関しては、経済学部が年度末に開催する学内の大規模な研究発表会『ゼミ大会』の実績の重要性を指導教官はあげている。学生間で、切磋琢磨してより良い発表になるようなグル

ープワークの自学風土が出来上がっているという。そういった学びの場を支援する設備体制が大学の各教室に整備されており、例えば各教室に常設されているプロジェクターなどの使いやすさが、学生のプレゼン練習頻度の充実さに繋がっており、不慣れな日本銀行本店での発表会場でも学生達は緊張すること無く発表に集中でき、最大限のパフォーマンスを出せたという。

次に課題についてだが、日銀グランプリは第一関門として、論文審査がある。ここには、大学全体の初年次教育の重要性をあらためて黒坂教授はあげている。今日の日本の大学の深刻な課題の一つとしてあげている情報収集能力、文献読解力、分析能力、作文能力などの全体的なリテラシー素養の低下は、『論文を書く』ということにおいて、これまで通りの教育対応では、今後難しくなることを懸念している。武蔵大学では、他大学にみられる初年次教育に特化し独立したカリキュラムや専任教員がないが、全体としてゼミなど少人数教育環境が充実しているのので、これまでは、各ゼミ（特に1,2年ゼミ）で初年次教育の要素は組み込まれてきた。図書館で開催される自由参加のガイダンスもリテラシー型の講座が多数充実しているのので、そういったものとの連携・活用も検討の余地があるだろう。

黒坂教授は、次にこういった成果の継続性の重要性もあげている。第三者機関のコンペで毎年上位に残るのは、教育力以外の要因も複雑にからみあってくるので難しい挑戦であることは理解できる。しかしながら、日銀グランプリに先駆けて2004年から現在のスタイルとなった『ゼミ大会』も、昨年のゼミ大会優勝チームが日銀グランプリで最優秀賞を受賞するなど、その精度や外部評価が等しいものになってきている点は重要である。

“ゼミをどう客観的に評価するか？”という課題の解答の一つとして、今回の事例は好例である。すべての学問領域でこのような教育的に適した発表の場があるとも思えないが、こういったその学問の第1専門領域の外部評価に積極的に挑戦することで、“ゼミの武蔵”のレベルにある一定の客観性をもって評価できることにつながると思われる。発表した学生は、実学的な経験を積むことで、学ぶ（研究する）楽しさや社会生活での自信に直結することはもちろんだが、こういった情報をFD的に共有することで、他の学生から教職員に至まで知的好奇心を刺激するものにつながるが大いに期待できる。



Musashi Univ.

被災地企業訪問から考える、
被災企業救済の新たなスキームの提案
～災害に強い国づくりファンド～

安蔵 洋平
竹田 勝利
島 真人
市村 真也

武蔵大学経済学部金融学科 黒坂ゼミ



黒坂ゼミの日銀グランプリ発表スライドの一部と最優秀賞受賞の様子

人文学部 学問を身近に感じさせる題材選び

取材協力：嶋内 博愛 准教授（人文学部）

文責：新宅 広二（FD 研究員）

武蔵大学に着任4年目の教員の授業アイデアや、どのようなことが課題となっているか人文学部ヨーロッパ文化学科 嶋内博愛准教授にお話を伺った。

嶋内准教授の研究領域は、民間伝承研究、ドイツ民族学、文化人類学である。今年度の授業担当は週5コマ（ドイツ語が2コマ、経済学部1年生文法およびヨーロッパ文化学科1年単語表現、講義は「ヨーロッパの神話と伝説2/比較口承文芸論2」、ゼミは1年対象の「基礎ゼミナール」と3年生以上対象の「専門ゼミナール(社会と文化)2A/比較口承文芸演習2」)で、これらのほか卒論ゼミと、今期は卒論準備ゼミと学科のリレー講義「ヨーロッパ文化入門講座/ヨーロッパ比較文化入門講座1」を1回担当された。

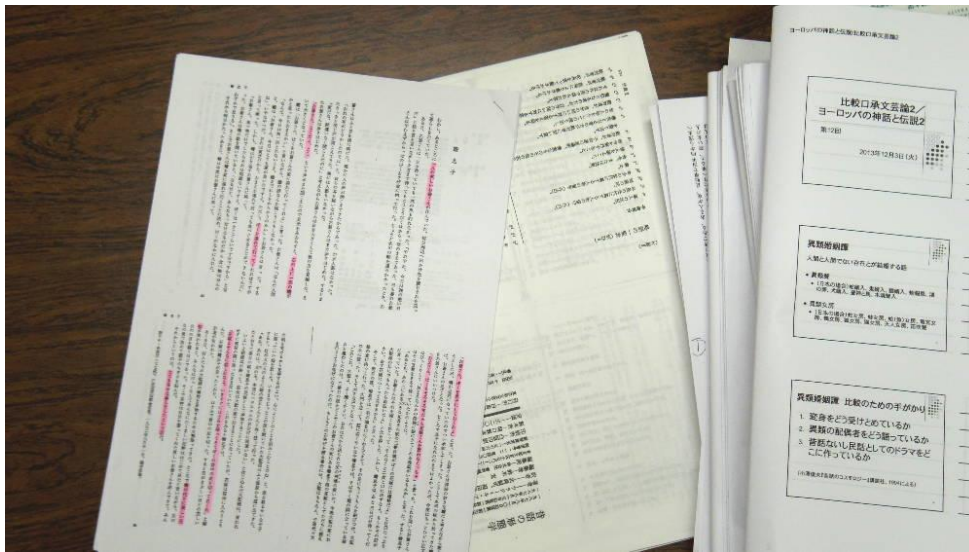
今回は、上記担当授業のなかから毎学期まとまった数の履修者が集まる、講義「ヨーロッパの神話と伝説/比較口承文芸論」を中心にお話をうかがった。この授業は新旧カリキュラムに開講されているものの、授業のタイトルが新カリ生にとっては「神話伝説」だが旧カリ生にとっては「口承文芸」（かなりおおざっぱに言えば、その代表選手は民話やメルヒェン）で、一見すると相反するととれるくらい違う。それゆえ新カリ始動で二枚看板になって以来（着任2年目）、両者がオーバーラップする領域を模索しながら毎年授業を組み立てている、とのことだった。神話伝説と口承文芸両方に目配りしつつ授業を組み立てるのは、頭を使う分、やりがいもあったという。

この授業では、口伝えで伝わる（伝わっていた）伝承を学問はどのように扱ってきたか、様々な分析方法を紹介し、履修者がより深く伝承を理解するようになるのを目標としている。しかし履修者の多くを占めるヨーロッパ文化学科の1年生への配慮もあり、いきなり理論を扱うのではなく、理論の紹介の前には導入としてかならず具体的な伝承——たとえば赤ずきんやロシア民話、神話からはアルゴ船のエピソードやトール神のハンマーにまつわる伝承、あるいは消えたヒッチハイカーといった現代伝説も含まれる——の提示から始める。

学生が興味を持ちやすい領域であり、それゆえ“誰もが知っている”ことをある程度前提にして題材を選んでいるものの、その“知っていて当たり前”という一般教養が欠落しているケースもまれにあるという。そういった経験から、反転学習のように事前に課題を配ったことも過去にあったが、当日資料を持ってこない学生や、資料配布週に欠席した学生がいるなどがあると、授業のベーシックな足並みが揃わないことから、現在は試行錯誤の結果、その日に資料を配布するスタイルになったという。『テキストを読む』『講師の話聞く』『自分で考える』という3つの同時進行の作業は、学生の認識レベルで個人差が大きいため、取り上げているフレーズがテキストのどこなのか視覚的にわかるように、教材を読む際には書画カメラで映し出し、読むのと同時に蛍光マーカーでしるしをつけるようにするという細やかな工夫もみられた。またリアクションペーパーを毎週課しており、そこに学生は、事前に与えられたテーマについてだけでなく、授業への質問や要望も書くことができる。そうすることで、授業の理解度を確認し、進行速度の調整等に役立てるだけではなく、100名単位の大教室ではなかなかでにくい学生の声を一はやくすくい上げられるようにするという配慮もみられた。

この学問を楽しむためには基礎知識が重要になってくるため、授業外独習時間の重要性を指摘している。そのためには、学生への図書館利用の啓発や図書館の機能強化などを、大学の課題としてあげていた。

またこの科目は、嶋内准教授が担当されるまでは現在名誉教授となられた先生が担当され、当時もかなり人気のある授業だった。人気授業の引き継ぎと言うことで、当初は重責を感じていたようであるが、嶋内准教授は、他大学での講師経験が豊富であったために、大きな問題なく講義をすすめられたようである。しかし場合によっては問題が生じる可能性もあるから、新任教員が初めてもつ授業が、前任者からの引き継ぎ科目の時には、不慣れな教員に対して各種事務的な手続きやシラバスの書き方などのFD的な新任教員サポートだけでなく、専門的な内容の引き継ぎやサポート体制を、今後のFD課題として検討しても良いかもしれない (ex. 教員の授業ポートフォリオなど)。



授業配布資料が充実しており、また学生が授業進行で“迷子”にならないような細かな工夫がされている

社会学部 『武蔵のゼミ』 風土を活かした“社会学”教育

取材協力：アンジェロ・イシ教授（社会学部）

文責：新宅 広二（FD 研究員）

今回、武蔵大学で「外国人教員」という立場から、日本人教員にはない視点で、海外の大学との違いや授業の工夫点について社会学部メディア社会学科 アンジェロ・イシ教授取材した。

語学系以外の専門分野での貴重な外国籍の先生で、グローバル時代のメディア社会学、移民研究を研究領域とし、卒業論文・卒業制作、ルポライティング研究/地域情報論、メディア社会学実習2、メディア社会学専門ゼミ2、メディア社会学専門ゼミ4、現代社会と人権/人権論2などの教鞭をとられている。本国ブラジルの大学のジャーナリズム専攻の教育内容は、単に卒業後に即戦力として取材の技術や文章の書き方を身につけたわけではなく、教授陣から教わった強い倫理観、正義感、ジャーナリズム観、職業観をそこで培ったと振り返っている。日本の大学は、大多数が3年生以降は「就職活動」モードに入ってしまう現実を危惧している。学生が企業説明会や面談、内定式や卒業前の事前研修のために、何の罪悪感も無く、当たり前のように授業を休む就職に偏重した日本の大学の風潮に海外との違和感を抱いている。同時に学生の自宅や図書館での独習する習慣の低さを問題にあげている。リテラシー系授業だけでカバーできるものではない社会学の分野において、情報収集能力、情報整理能力、情報発信能力を養うため、日頃の新聞を読む習慣や専門書を読みこなす習慣が近年著しく下がっていることを深刻に受け止めている。

それらを踏まえ、グローバルな人材育成を授業の中で強く意識させる仕掛けが数多くある。しかもそのこだわりは、「日本にいながら感じるグローバリゼーション」にフォーカスされており、例えば日本にあるチャイナタウンなどをフィールドとして、学生に自分たちの生活の中に異文化が共存しているということを感じさせている。東日本大震災後では、日本に住む「外国人」がどうなり、何をしてきたのかなど、ユニークなグローバル人材育成を社会学の授業に意識的に組み込んでいる。

学生がまとめたレポートやプレゼンでは、テーマに関わらず「外国人が見たらどう思うか？」ということも問いかけ、“日本と世界”という視点を意識させている。そして社会学という学問の面白さは、武蔵の“自ら学ぶ”風土を重視していると感じた。たとえば社会学部の年度末の研究発表会『シャカリキフェスティバル』の発表者の選出は、ゼミ生自身に選ばせるという“社会学”的な面白さが組み込まれている。総合力だけでなく、社会学としての取り上げるテーマのセンス-そのテーマやタイトルなど、若い学生の感性と主体性を信じて、自由に発表させるということにFDとして特筆すべき授業や研究指導の姿勢がうかがえる。つまり学生の発表内容の不備や稚拙さを含めて発表の場で、社会学分野での実践的な“学び”が想定されているわけである。個々の個性や能力を見極めて対応している。ゼミを通して成長する学生が、必ずしもGPAの高い成績優秀者とは限らないこともあげており、GPAの低い学生や内向的であったり、生活力が低い学生が4年間で成長させることが出来たときに、FDとしての本質を感じることもあるという。武蔵は少人数教育環境なので、こういった教育の取り組みは評価に値するが、下位層の学生を中間層にまで押し上げた場合の“教育力”を評価する指標が無いので、こういった点は武蔵大学FDの今後の検討課題かもしれない。

また、イシ教授はオリジナルの授業評価アンケートを実施している。授業内容に則した7項目と自由記述の設問のアンケート用紙で、100名単位の授業に使用している。今年度から全学共通の授業評価アンケートを前学期のみとしたので、後学期はオリジナルアンケートで対応して自己分析・授業改善している。

武蔵の学生のカリキュラム内容の不满による転科希望やドロップアウト率が低い点について考えを伺ったところ、社会学部の場合、マッチングのズレを少なくするためにレポートや面談などに時間をかけていることをあげていた。他大学のゼミは、事務的に希望順に割り振られるものが多い中、武蔵大学の社会学部では、こういった対応が可能なこともFD的観点から重要な手法として、あらためて情報共有しておいたほうがよいであろう。

<p>ルポライティング 研究 アンケート 2013 Angelo Ishi アンジェロ イシ</p> <p>この「ルポライティング研究」は全国のどの大学にもない授業名で挑んでいる完全オリジナルな授業です。次に開講されるのは2年後ですが、その際、みなさんのご意見を参考にしたいと思えます。そこで、感想や意見に限らず、積極的かつ具体的なご提案を期待しています。ご協力に感謝申し上げます。</p> <p>1. 授業の内容(毎回のテーマ選定、単行本を出したルポライターの研究を中心とした授業の組立て)について: ()これよかった。理由: _____ ()改善の余地あり。何をどう変える? _____</p> <p>2. 授業のやり方(グループ・ディスカッション → 意見を言ってもら → ぼくの解説説明をする)について: ()これよかった。理由: _____ ()改善の余地あり。何をどう変える? _____</p> <p>2-1 授業の時間配分は:()ちょうどいい ()グループディスカッションの時間が短過ぎる ()グループディスカッションの時間が長過ぎる ()グループディスカッション自体を無くしてもいい ()その他: _____</p> <p>2-2 グループ分けの人数が5人前後というのは:()良い ()多過ぎる ()少な過ぎる ()分からない</p> <p>2-3 ディスカッションのテーマは:()良い ()1つに絞るべき ()もっと簡単にすべき ()その他: _____</p> <p>2-4 グループごとにディスカッション成果を書かせるという方法については:()良い ()変えたほうがいい(どのような方法に?) _____</p> <p>2-5 ディスカッションの成果についてグループの代表にマイクを向けるという方法は:()良い ()もっと強制的に各グループの意見を言わせてもいい ()逆に、手が挙がらない場合は無理に意見を言わせなくてもいい</p> <p>3. 授業の出席の取り方については: ()これよかった。理由: _____ ()改善の余地あり。何をどう変える? _____</p> <p>4. 授業の予習課題の出し方(次週までにプリントを読んで来るという宿題)について: ()これよかった。理由: _____ ()改善の余地あり。何をどう変える?(それとも、どうせほとんど誰も予習しないので事前配布しなくてもよいと思う?) _____</p> <p>4-1 予習のプリントの枚数は適切でしたか? ()ちょうどいい ()もっと多くても大丈夫 ()多すぎる</p> <p>4-2 あなたはどのくらい、事前に読んできていましたか?()いつも ()ほぼ毎回 ()ほとんど読んでいない()一度も読んでいない コメント・提案: _____</p> <p>5. 成績評価方法(レポート課題で、複数のオプションから選んでもらう)について: ()これよかった。理由: _____ ()改善の余地あり。何をどう変える? _____</p> <p>6. 大人数の履修者については:()苦にならなかった ()抽選で少数人に制限したほうがいい(何人くらいに?) コメント・提案: _____</p>	<p>7. 授業ごとの細かい評価 → 今後、何を残すべきか(休んだ場合は、コメント欄に「休」と書いてください):</p> <p>村上春樹 (前編)『アンダーグラウンド』の「はじめに」を解説しよう コメント: _____ ()ぜひ残すべき ()余裕があれば残す ()どちらでもいい ()必要ない _____</p> <p>村上春樹『アンダーグラウンド』第二弾「中身」と「終戦」を解説しよう コメント: _____ ()ぜひ残すべき ()余裕があれば残す ()どちらでもいい ()必要ない _____</p> <p>鎌田慧から学ぶルポの作法 コメント: _____ ()ぜひ残すべき ()余裕があれば残す ()どちらでもいい ()必要ない _____</p> <p>立花隆から学ぶルポ(そして論文)の構想力 コメント: _____ ()ぜひ残すべき ()余裕があれば残す ()どちらでもいい ()必要ない _____</p> <p>井田真木子から学ぶルポライターの「感傷力」と「共感力」 コメント: _____ ()ぜひ残すべき ()余裕があれば残す ()どちらでもいい ()必要ない _____</p> <p>森達也から学ぶルポの社会的影響力 コメント: _____ ()ぜひ残すべき ()余裕があれば残す ()どちらでもいい ()必要ない _____</p> <p>私が書いたリード文の特選 → 文章の出だしをどのように工夫するか コメント: _____ ()ぜひ残すべき ()余裕があれば残す ()どちらでもいい ()必要ない _____</p> <p>社会問題をどのようにルポとして料理するか → ルポライターによって同じテーマがこんなに違う(ブラジル人)</p> <p>()ぜひ残すべき ()余裕があれば残す ()どちらでもいい ()必要ない コメント: _____</p> <p>ルポライターによって同じテーマがこんなに違う → PART 2 日本に住む外国人の巻 コメント: _____ ()ぜひ残すべき ()余裕があれば残す ()どちらでもいい ()必要ない _____</p> <p>散ってプロの書き手の文章を添削し、より魅力的な原稿に書き直すワークショップ コメント: _____ ()ぜひ残すべき ()余裕があれば残す ()どちらでもいい ()必要ない _____</p> <p>日本の優れたノンフィクション → 猪瀬直樹「ミカドの肖像」と広瀬隆「パンドラの箱の悪魔」 コメント: _____ ()ぜひ残すべき ()余裕があれば残す ()どちらでもいい ()必要ない _____</p> <p>海外の傑作ルポルタージュ『世界をゆるがした十日間』と『冷血』 コメント: _____ ()ぜひ残すべき ()余裕があれば残す ()どちらでもいい ()必要ない _____</p> <p>取り上げられなかったけれど、ぜひ取り上げてほしいルポライターもしくはルポ本はありますか?(複数書いていいです): _____ → ゲストスピーカーの鈴木智彦さん:()また彼を呼ぶ ()違う人を呼ぶ。例えば誰を?(どんな人?) _____ 鈴木さんの授業は2回にわたってやりましたが、それは()よかった ()よくなかった ()わからない。理由: _____</p> <p>授業では大手新聞の連載ルポや週刊誌のルポ記事は取り上げませんでした。あなたの意見では: ()取り上げなくてよかった ()新聞のルポは研究したかった ()週刊誌のルポは研究したかった → あなたはこの授業で何がいちばん身についた(印象に残った)か? _____</p> <p>ぼくへのコメント、メッセージ、注文、提案、何でも自由に書いてください: _____ _____</p> <p>→ あなたの名前を明かしたい場合は書いてください: _____</p> <p style="text-align: right;">ありがとうございました! OBRIGADO!</p>
--	--

オリジナルの授業アンケートを作成・実施して学生の理解度・改善点などを把握するツールとしている